

日蓮大聖人御書全集

あぶつぼうのあまごぜんごへんじ

阿仏房尼御前御返事

新版
1729
ゝ
1731

あぶつぼうのあまごぜんごへんじ

阿仏房尼御前御返事

けんじ がんねん

がつ にち

さい せん にちあま

建治元年('75)

9月3日

54歳 千日尼

おんふみ い

ほうぼう せんじん きようじゅう

ざいほう

御文に云わく「謗法の浅深・軽重においては罪報いか

うんぬん

んや」云々。

そ ほけきょう こころ

いつさいしゅじようかいじようぶつどう

おんきよう

夫れ、法華經の意は、「一切衆生皆成仏道」の御經な

しん

もの じようぶつ

遂

ぼう

もの

り。しかりといえども、信ずる者は成仏をとぐ、謗ずる者

むけんだいじよう お

ひと しん

きよう

きぼう

は無間大城に墮つ。「もし人信ぜずして、この經を毀謗せ

すなわ

いつさいせけん

ぶつしゆ

だん

ないし

ひと

みようじゅう

ば、即ち一切世間の仏種を断ぜん乃至その人は命終して、

あびごく い

ほうぼう

もの

せんじん

きようじゅう

阿鼻獄に入らん」とは、これなり。謗法の者にも浅深・軽重

いの異あり。法華經を持ち信ずれども、誠に色心相応の信者、

のうじしきよう ほけきよう たも しん まこと しきしんそうおう しんじや

能持此經の行者はまれなり。これらの人は、介爾ばかりの

ほうぼう じんじゆう つみ う ひと けに

謗法はあれども、深重の罪を受くることはなし。信心は

強 ほうぼう 弱 ゆえ たいすい

つよく、謗法はよわき故なり。大水をもつて小火をけすが

ごとし。

ねはんぎよう い ぜんびく

涅槃經に云わく「もし善比丘あつて、法を壊る者を見て、

お かしく くけん こしよ まさ し

置いて、呵責し驅遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人

ぶつぼう なか あだ よ くけん かしく こしよ

は仏法の中の怨なり。もし能く驅遣し呵責し挙処せば、こ

わ でし しん しょうもん うんぬん きようもん 責

れ我が弟子、真の声聞なり」云々。この經文にせめられ

たてまつ

にちれん

しゅじゅ

だいなん

あ

ぶつぽう

なか

奉つて、日蓮は種々の大難に値うといえども、「仏法の中

あだ

誠

まぬか

の怨なり」のいましめを免れんために申すなり。

ほうぼう

いた

せんじん

いつわ

おろ

ただし、謗法に至つて浅深あるべし。偽り愚かにして、

責

とき

しんごん

てんだいしゅうとう

ほつけひぼう

もの

せめざる時もあるべし。真言・天台宗等は法華誹謗の者、

甚

かしくく

いとう呵責すべし。

だいちえ

もの

にちれん

ぐつう

ほうもんふんべつ

しかれども、大智慧の者ならではの日蓮が弘通の法門分別

差置

しがたし。しかるあいだ、まずまずさしおくことあるなり。

りっしょうあんこくろん

立正安国論のごとし。

言

言

じゅうざいまぬか

がた

い

つみ

免

いうといわざるとの重罪免れ難し。云つて罪のまぬか

るべきを、見^みながら、聞^ききながら、置^おいていましめざるこ

げん に とく

やぶ だいむじひ

しょうあんい

と、眼・耳の二徳たちまちに破れて大無慈悲なり。章安云

じな

いっわ

した

すなわ

かれ

あだ

とう

わく「慈無くして詐り親しむは、即ちこれ彼が怨なり」等

うんぬん

云々。

じゅうざいしやうめつ

りやく

こころ

然

重罪消滅しがたし、いよいよ利益の心もつともしかる

きやうざい

もの

責

とき

責

べきなり。軽罪の者をばせむる時もあるべし、またせめず

置

そうろう

じねん

直

へん

責

じた

しておくも候べし。自然になおる辺あるべし。せめて自他

つみ

のが

許

ゆえ

いっこうほうぼう

の罪を脱れて、さてゆるすべし。その故は、一向謗法にな

勝

だいじゅうざい

う

かれ

あく

のぞ

れば、まされる大重罪を受くるなり。「彼がために悪を除く

すなわ かわ おや
は、即ちこれ彼が親なり」とは、これなり。

にちれん でしだんな なか おお

日蓮が弟子檀那の中にも、多くかくのごときことども

そうろう

あま ごぜん

聞

そうろう

候。さだめて尼御前もきこしめして候らん。

いちのさわのにゆうどう

にちれん

だんな

うち

そうら

そと

一谷入道のこと、日蓮が檀那と内には候えども、外は

ねんぶつしや

そうろう

ごしょう

念仏者にて候ぞ。後生はいかんとすべき。しかれども、

ほけきようじつかんわた

そうら

法華經十卷渡して候いしなり。

しんじん

たも

ぶつぼう

どうり

ひと

かた

いよいよ信心をはげみ給うべし。仏法の道理を人に語ら

もの

なんによそうにかなら

ん者をば、男女僧尼必ずにくむべし。よしにくまばにくめ、

ほけきよう

しゃかぶつ

てんだい

みようらく

でんぎよう

しょうあんとう

きんげん

み

法華經・釈迦仏・天台・妙楽・伝教・章安等の金言に身を

によせつしゆぎよう

ひと

ほけきよう

い

まかすべし。「如説修行」の人とは、これなり。法華經に云

くふ

よ

よ

しゆゆ

と

うんぬん

あくせまつぼう

わく「恐れの世において、能く須臾も説かば」云々。惡世末法

とき

さんどくごうじよう

あくにんとうあつ

そうろうとき

しやうほう

ざんじ

しん

の時、三毒強盛の惡人等集まりて候時、正法を暫時も信

たも

もの

てん

にんくよう

きやうもん

じ持ちたらん者をば天・人供養あるべしという經文なり。

たび

だいがん

た

ごしやう

ねが

たま

すこ

ほうぼう

この度、大願を立てて、後生を願わせ給え。少しも謗法

ふしん

失

そうら

むけんだいじやううたが

たと

不信のとが候わば、無間大城疑いなかるべし。譬えば、

かいじよう

ふね

乗

ふね

疎

湮

い

海上を船にのるに、船おろそかにあらざれども、あか入り

かなら

せんちゆう

ひとびといちじ

し

ぬれば、必ず船中の人々一時に死するなり。

睨

けんご

あり

あな

かなら

つい

たた

なわて堅固なれども、蟻の穴あれば、必ず終に湛えたる

みず溜

水のたまらざるがごとし。

ほうぼうふしん 塗 取 しんじん
謗法不信のあかをと、信心の

睨 固

なわてをかたむべきなり。

あさ つみ われ 許
浅き罪ならば、我よりゆるして

くどく え

おも 過

しんじん 励

功德を得さすべし。重きあやまちならば、信心をはげまし

しょうめつ

て消滅さすべし。

あまごぜん おんみ

ほうぼう つみ せんじん きようじゅう ぎ 問

尼御前の御身として、謗法の罪の浅深・軽重の義をとわ

たも

有 難 によにん

せ給うこと、まことにありがたき女人にておわすなり。

りゅうによ

劣

われ だいじょう おし ひら

竜女にあにおとるべきや。「我は大乘の教えを聞いて、苦

しゅじょう どだつ

ぎしゅ と

の衆生を度脱せん」とは、これなり。「その義趣を問えば、

すなわ かつ

ほけきょう ぎり と ひと

これは則ち難しとなす」といって、法華經の義理を問う人

はかたしと説かれて候。
と そうろう

あいかま あいかま ちから

相構えて相構えて、力あらんほどは謗法をばせめさせ給

ほうぼう 責 たも

にちれん ぎ たす たも

うべし。日蓮が義を助け給うこと、不思議に覚え候ぞ、

ふしぎ おぼ そうろう

不思議に覚え候ぞ。あなかしこ、あなかしこ。

くがつ みつか

九月三日

にちれん かおう

日蓮 花押

あぶつ ぼうのあま ごぜん ごへん じ

阿仏房尼御前御返事